安倍外交、根幹にある難題 （鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2014/3/18 7:00 | 日本経済新聞　電子版

鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる

「ヨーロッパのキャピタル・マーケットみたいに揺れる。ビルごと揺れているのだから。このホテルに泊まる時は、低層階がいい」

サンフランシスコのホテルの高層階に泊まった。朝、エレベーターを待っていたら、同じフロアに宿泊している方に話しかけられる。朝方まで強風が吹いて、高層ビルの上層階の揺れが続いたのだ。夜遅く、会食が終わって部屋に戻り、机に向かってパソコンを開き、メールを読みだしたら、ゆるゆると、なんだか揺れているのである。「一瞬、地震か」と、身構えたのだが、時間がたっても同じペースでゆるゆると揺れ続けていて、地震ではないとほっとしたのだが、あまり気持ちのいいものではない。市街地の向こうにひろがる海の眺めに魅せられて、サンフランシスコに来るとよく泊まるホテルである。タバコを吸うとクリーナー・フィーとして特別なチャージがかかることは、怒りながら我慢をするにしても、机に向かって仕事をしようとすると、わずかながらでもゆらりゆらり揺れ続けるのは慣れない感覚で落ち着かず、揺れの方に注意が行ってしまい、結局はベッドにもぐり込んでしまう羽目になった。ま、ヨーロッパに限らず、キャピタル・マーケットほどの激しい乱高下ではないけれど。

サンフランシスコの「揺れるホテル」の窓から眺める風景（筆者撮影）

東日本大震災の折、パリに居た。テレビで地震と津波による凄惨な映像を見て、その晩パリから成田行きの便に乗り、翌日の午後、東京に戻った。なんとかオフィスにたどり着いたら強い余震が繰り返し襲ってきて、揺れが来るたびに緊急の会議中にもかかわらず、私だけが慌てていたことを思い出した。「この程度の揺れには、慣れましたよ」と、私以外のスタッフは平然と会議に集中していて、余震の揺れの度に反応する私をみて、「意外に弱いのですね」といった顔をされていたのである。ホテルのささやかな揺れを感じて「今年も3月11日は海外にいるのだ」と妙な感慨にふけっていた。

大震災の時は民主党政権だった。ずいぶんと昔のことのように思われる。過ぎ去った時間を振り返る度に、改めて時の流れのはやさに驚く。<日が暮れて　鐘がなり/月日は流れ　私は残る>といった叙情も感傷もなくなって、ただただ異様なはやさで時間が消えていく。<光陰矢のごとし>。そんな言い古された言葉の方が、歳をとってしまった人間にはふさわしいようだ。

今週から、私のブログも5年目に入る。つたない話を4年間、一度も休まず、書き連ねてきたことを振り返ると気恥ずかしい限りなのだが、何事によらず休まず続けることが私の唯一の取りえだという思いで、続けさせていただいている。IIJという会社も設立から22年目になるのだが、その間、一日も休んだことがないのは、わが社で私だけのようだ。単に身体が強いだけのことかもしれないけれど。

10周年を迎える「東京・春・音楽祭」（上野の東京文化会館=筆者撮影）

サンフランシスコから午後、成田に着いて、そのまま上野に直行する。私が主宰をする<東京・春・音楽祭>の初日である。小澤征爾さんと始めた音楽祭も10年目の節目になる。当初、「東京のオペラの森」というタイトルで、日本から世界に発信できる新制作のオペラを東京でつくろう、そんな思いで始めた音楽祭が5年目から、「東京・春・音楽祭」とした。明治のはじめ、財政難にもかかわらず、維新を担った政治家が、世界と肩を並べるような文化ゾーンをつくろうという意志を公表し、以来、震災や戦禍にもかかわらず、100年以上にわたって教育機関から博物館、美術館等、あらゆる文化施設を営々と築き上げ、西洋文化を受容してきた上野は特別な地域である。言うまでもなく、上野は江戸時代以来の桜の名所であり、どんな時代にも春の訪れをあでやかな桜景色で、庶民を楽しませてくれてきたのである。桜の蕾（つぼみ）がふくらみ始める3月の半ばから桜吹雪となってあでやかな桜の季節が終わるまで、130を超えるコンサートを催すまでになった。小澤さんと約束して上演をした4つの新制作オペラ、「エレクトラ」「オテロ」「タンホイザー」「エフゲニー・オネーギン」はウィーンの国立歌劇場、パリのオペラ座をはじめ、フィレンツェやバルセロナの劇場で上演され、日本から世界へ発信するという当初のもくろみは実現できた。

東京に住む、あるいはかかわりを持つ個人や組織が、ささやかでも自ら持ち寄った資金で、誇れるような音楽祭を上野という地でつくりたいという私の思いは、少しずつ広がりを見せている。当初は、怪訝（けげん）な面持ちで遠くから眺めていた音楽の関係者の見方も変わった。なによりも地元の方々の熱意ある支援、そして資金面をサポートしてくれる個人や企業の輪が広がって、春の上野にふさわしい音楽祭になりつつあるのは、この季節、嬉しいことである。

「どんな音楽祭でも続けることが大切で、続けるという営為こそ音楽という素晴らしい芸術が大きな輪をつくるフェスティバルという形になって、人々になんらかの慰めや喜びの時間を共有できるまでになる。聴衆より演奏家の方が多い。そんな時期を乗り越えなくては」

2年目の音楽祭にヴェルディの「レクイエム」を指揮していただいて以来、超多忙な時間を縫って、この音楽祭で感動的な演奏を公演してくれているリッカルド・ムーティさんの言葉は、音楽という異質の世界に戸惑っていた私にとって、ずいぶんと大きな励ましとなった。2005年、最初の年の演奏会で東京文化会館の客席がほぼ赤い色になったことがある。アラン・ギルバート（現ニューヨークフィル監督）指揮の演奏は素晴らしかったのだが、聴衆が少なく椅子の赤い色ばかりが目についたのである。売れたチケットはわずか2割、ポツリポツリとお客さんがいるばかり。そんなスタートだった。

インターネットという新しい世界を切り開いてきたIIJの創業以来の歩みも、何度となく襲う苦しい事態を乗り切ってきた連続なのだが、音楽祭も同じである。なによりも、続けることの大切さを改めて学ばされている気がする。3.11の東日本大震災の折、あらゆるイベントが自粛されたのだが、「これほどの悲劇に襲われた時だからこそ、音楽によって人々に喜びと慰めを共有することができるようになるのが音楽の力である」――。そんな決断をして余震で揺れる会場にもかかわらず、音楽祭を強行した記憶はいつまでも忘れない。予定をしていた公演は3分の1程度しか実現できなかったのだが、音楽祭の最後の日に急きょ、趣旨に賛同し、滞在先のサンクトペテルブルグから駆けつけていただいたズービン・メータさんが指揮したベートーベンの第9は、指揮者、演奏家、聴衆、誰もが目に涙を浮かべるという感動的な演奏となった。その演奏は、この音楽祭の宝として記憶している時間である。音楽は音がなくなると消えてしまい、音が鳴っている時の記憶だけが残る芸術である。だからこそ、瞬時に消えてしまう時間の流れのなかで生きる人の生命の琴線に、もっとも深いところで触れるものだと思う。

ニューヨーク、サンフランシスコと駆け足の出張だったが、テレビのニュースはウクライナ情勢と、マレーシア航空機の謎に包まれた消息不明の話ばかりだった気がする。オバマ大統領の形容には「weak（弱い）」という言葉が頻繁に使われていた。外交の基本は軍事力にあるという大前提が変わることはないのだが、その構造にわずかでも変化の兆候があると、戦争という事態を引き起こすまでに至らないにしても、さまざまな確執が表に出てくる。ロシアへの編入について、クリミアでは住民投票が行われた。消息不明のマレーシア航空機の謎は、マレーシアの首相会見で、周到に準備されたハイジャックではないかという見方が明らかにされている。外交等々について、まったくの門外漢である私はニュースを眺めて、海外の報道を読むだけである。

帰国した翌日、すれ違いに米国に戻るという知人の学者から連絡があって、夕暮れ前、ホテルのバーで飲む。安倍首相に対する米国の不快感について、ぼそぼそと教えてもらう。マティーニを飲みながらの話で、いい加減な会話だったのだが、時差ぼけと、酔いの回った頭にも気になった話が記憶に残った。専門家にとっては今さらと言えば、今さらの話に違いないだろうが。

「戦後68年も経て、靖国や慰安婦問題をはじめとする韓国の執拗な対日批判は、日本人にとっては不愉快極まりない話だと思うけれど、韓国の外交としてはピンポイントの対米外交として巧妙なやり方かもしれない。鈴木さん、ずいぶん前にカート・ボネガット・ジュニアの話を引用して、第2次世界大戦末期のドレスデンの爆撃と東京大空襲こそが、人類史上、最大の無差別虐殺だと紹介したことがあるでしょう。ドイツを無差別に爆撃したこと、東京への無差別な大空襲や原爆投下が問題とならないのは、あの戦いは米国にとって正義の戦いであり、聖戦だから、あのような行為も絶対的に正義なんです。侵略戦争を仕掛けた、日本の戦前の政治体制を木っ端みじんにして、米国流の民主主義の基本原理を日本に定着させるための正義の戦いだったという大前提を崩しかねない発想については、徹底的に叩くという図式は変わっていない。安倍首相の行動、政策はその根幹を揺るがしかねない。ある意味、日本人の感情として、民族主義的な訴えにつながるような歴史観が表に出る兆候に対しては、過敏と言えるまでの対応をせざるを得ないわけ。その意味で、日本が侵略をしていた時代のあらゆる批判されるべき行為について、韓国がその宣伝に過剰な努力を払っていることについても、米国からいえば反論し難い、筋が通った外交活動とさえ言ってもいいのかなあ」

戦後体制の枠組みという面では、戦後は終わっていないのである。敗戦によって廃虚となった日本が、戦後、長期に渡って経済的繁栄と平和を享受できたのは、戦後体制という枠組みを慎重に維持してきたことによるのである。酔って帰宅したら携帯

にメールがあった。20代の後半から一緒に飲んだくれていた友人の訃報である。50代の後半からずいぶんと苦労を重ね、ようやく志を実現する機会を得て、活躍を期待していた友人である。まさにこれからという時の死である。人生、そんなものだとつぶやくしかない。遠く離れた場所の葬儀に参加もできない私は、無念であったろう彼の冥福を祈るほかない。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一　IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
こちらの投稿フォームからご意見をお寄せください。

読者からのコメント

山本　昭さん、60歳代男性
日本はサンフランシスコ平和条約を否定することなどありません。ただ、最近の韓国の言動は看過できません。日本人の多くは村山談話も河野談話も概ね了解しています。しかし、20万人の性奴隷とはどうでしょうか。ましてその記念碑をアメリカ各地に建てるなど理解を超えてます。靖国参拝も韓国は強く非難しており、誤った歴史認識の象徴としていますが、日本は韓国と戦争をしていません、いわゆるA級戦犯問題でもないでしょう。日本の韓国支配の歴史は韓国からすると対日戦争であるとの認識でしょう。つまり、日本の近代史を全否定しないと彼らの理屈は成り立ちません。これは無理です。日本は戦後卑屈なまでの平和主義を貫き、特にアジアの国々には多大の経済協力をしてきました。しかるに彼らが力をつけたらなんと言う仕打ちですか。若い人がどう思うか心配です。

団塊の凡人さん、60歳代男性
原爆投下も日本各地の都市への無差別爆撃も、非戦闘員の大量虐殺という明らかな「人道に対する罪」です。アメリカがこれに反省する姿勢を見せない事は、自国の立場を守るための「政策的正当化」。中国共産党政権が、声高に南京大虐殺を糾弾しまた靖国批判している事も、韓国が慰安婦問題を世界各地に熱心に発信している事も同様。中国・韓国にとっては、自らの政権維持を有利にするための効果抜群の政策。それらを大声で主張するだけ（コストはほぼゼロ）で、自国民の支持獲得効果抜群に加え、日本叩きによる政治的・経済的効果を享受できる…　日本が米国に、原爆投下などを糾弾しない事も政策的配慮。その方が国益に資する…　どこの国民にとっても大切な事は、客観的事実と政策的対応とを混同することなく今後のあるべき姿を考える事のはずですが、現実的には無理。人間社会からいつまでたっても戦争の危険が続く所以でしょう。

事実は劇薬さん、60歳代男性
タブーの多い中、健全な批判精神と文化への愛情を保ち、強かに5年目を迎えられました快挙に敬意と感謝を表します。今「無念」はウクライナ。「正義」の戦いを起こしたものの、ポーカーフェイスの御仁の伝統的かつ用意周到・緻密な指し手に、G1からGゼロ更にはG-1へと邁進する疲れた叔父さんは別のゲームで対処。ただ最後は「正義」のウクライナがババを引くシナリオで？お隣に前世紀の『夢』を掲げる御仁が現れたわが国では他人事ではない。「思い」を国益より優先した御仁が居る。多くの日本人は日本には信教の自由があり「外国からとやかく言われる筋合いはない」との思いが強いが、戦犯であろうとなかろうと「300万人以上の日本人を結果死に至らしめた戦争指導部は英雄、神なの？」と青い目で聞かれYesと答える人は、それほど多いのだろうか？英霊を救え！ならまだしも。

小倉摯門さん、60歳代男性
鈴木さんは遠慮して「難題」と仰るが、有態に言えば安倍政治の「大きな過ち」だと思う。首相就任当初の「少しの間違いも許されない政治」の旗幟を下ろさず深く肝に銘じていれば避けられた過ちだったと。国際関係の大海を永く泳いできた米国は「大きな土俵」での大きな相撲に長けているから、安倍首相があの戦争全体を反省する村山談話を直す構えに出ては引っ込めたり靖国参拝を強行したり「小さな土俵の小さな相撲」に失望したに相違ない。安倍政権のその過ちが「パンドラの箱」を開けて仕舞った。その影響は国内的にNHKの歪んだ一部経営委員や知識人に止まらず一般大衆からも狭浅短な主張を解き放って仕舞った。また、国際的にも中国や韓国が、戦時中日本が犯した様々な局地的悪行を「小さな土俵」で厳しく糾弾する拠り所を与えたのだと思う。売り物のアベノミクスが立ち往生している今、賢明な市民は何を考えどう動くべきなのか？が問われていると思う。

50歳代男性
毎週、楽しみにしております。今回のは、なぜか沁みました。これからも、こうした話しを読ませてください。

主夫さん、60歳代男性
「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」はフランス文学者だった渡辺一夫氏の評論です。パレスチナ問題もチェチェン問題も、かって住んでいた民族、住民が「土地=故郷」を追われたことに端を発しています。領土問題と過去の歴史認識を巡って、日中、日韓関係は冷え切っていますが、世界の各地域で起こっていることと同じように70年ぐらいの年月では解決しない

問題なのでしょうか？さておき、3月23日に、東京・春・音楽祭2014の模様を高画質の公開ライブ中継されるのを心待ちにしています。音楽を始めとして文化を愉しみ、歴史にも明るくなりたいものです。日経電子版の開始とともに始まったブログも楽しみです。

ないっふさん、70歳代以上男性

前世紀は戦争の世紀というが、非戦闘員への大量殺戮の世紀でもあった。価値評価をせずに、a.事例（発生地）、b.推定死者数（非戦闘員率）、c.遂行期間、d.使用火器、e.責任者（命令者、実行者）を、1914年～2014年について、表化して、世界の共有にすべきだろう。

Beethovenさん、50歳代男性

戦後68年も経て、靖国や慰安婦問題をはじめとする韓国の執拗な対日批判は、日本人にとっては不愉快極まりない。朝日新聞の記事によれば、日本の経済支援に頼っていた国々での元慰安婦への口封じなど証拠隠滅は徹底しており、今でも「強制の証拠はない」」と嘯き被害者を娼婦扱いする日本の風潮に、被害国が「今も」憤るのは当然だと思いますが？　世界が彼らに同情的なのも当然でしょう。この問題で米国政府や議会が日本に厳しいのは、機密指定がまだ解けていないが、山のように証拠があると司法当局から連絡を受けているからでしょう。もはや日本は、証拠隠滅を認め謝罪しなければ、口先で何度謝っても、誠意ある謝罪とは思われないのです。

ビジネスリーダー トップに戻る　ビジネスリーダー Menu一覧　経営者ブログ トップ

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.